



大賞 創価女子短期大学 国際ビジネス学科

「女性のエンパワメント(Women's Empowerment)」

指導教員：国際ビジネス学科 准教授 青野 健作 氏

■「生理の貧困」の解決へ

——学生たちの取り組みについて

——今回、大賞を受賞されたのは青野先生のゼミ生ということですが、どのような活動をされたのでしょうか？

ゼミ生たちが挑戦したのは「生理の貧困」の解決に向けた取り組みです。当ゼミでは「SDGsに関する社会課題に、女性の感性を活かして挑む」を大テーマに掲げています。それをベースに各ゼミ生が具体的な研究テーマを探していくわけですが、その中で見つけ出したものの一つが「生理の貧困」です。

——「生理の貧困」という言葉は最近聞かれるようになりましね。

はい、経済的な理由などから容易には生理用品を購入できない状態を言いますが、昨年頃からこの問題にスポットが当たり始め、社会でも広く知られるようになってきました。ゼミ生が情報収集を進める中、女性では約40年もの長きにわたり当たり前のように訪れる生理について、実はこんなに困っている人がいるというところに行きつき、それならば、と「生理の貧困の解決」をテーマに研究を進めることになりました。

調査を進める中、ゼミ生たちの目に留まったのが、オイテル株式会社です。同社は、様々な施設の個室トイレにおいて、スマートフォンをかざせば誰にも知られずに生理用ナプキンを無料で取り出せるディスペンサー「OiTr（オイテル）」を設置するサービスを展開しています。

——生理用品にアクセスしづらい女性にとって、大変嬉しいサービスですね。

ですので、ゼミ生たちはOiTrを広める手段がないかを考えていきました。本学がある東京都では、都が抱える課題に都民が改善策を提案する「都民による事業提案制度」というものがあります。ゼミ生は「都内の女子大・女子短大にOiTrを設置してもらえないか」とこれに応募しました。しかし、

結果は残念ながら不採用でした。それでも、「女性である自分たちに直結するこの課題を、このまま終わらせたくない」と諦めずに話し合いを続けました。その中で学生たちが導き出したのが「東京都による取り組みが難しいのなら、まずは自分たちの手で、自分たちがいるこの創価女子短大で、設置を目指そう」という結論でした。

——創価女子短大内での設置を目指したわけですね。無事に設置に至ったのでしょうか？

最終的にはOiTrを設置することができました。ですが、事はそうすんなりとは運ばず、設置まで5カ月を要することとなりました。いくつも課題があり、その一つは予算の捻出です。大学という組織は、新規事業を行うのに費用が発生する場合は予算を組む必要があります。その予算の出どころをどうするのか。またOiTrを設置するということは、すなわち大学の壁に穴をあけるということです。それをして大丈夫なのかという現地調査もありました。また、Wi-Fiの通信環境が整っているか、そもそもどこに設置するのかなど、ゼミ生も立ち会いながら実地調査が進められました。

——ゼミ生が各部署との調整を図っていったのでしょうか？

いえ、今回窓口になって各部署との折衝に当たってくれたのが短大の「学生課」です。ゼミ生が作成した提案書の提出先が学生課で、学生課の担当者が各部署と調整を行い、何か問題が生じた場合はゼミ生に伝える。それを受けたゼミ生が話し



▲創価女子短大に設置された「OiTr」。スマートフォンをかざせば生理用ナプキンを無料で取り出せる

合い、再び学生課に依頼する、その繰り返しでした。そして提案から5カ月後、ようやく設置にこぎつけることができました。

——では学生課の方も相当苦労されたのではないのでしょうか？

まさにそうで、学生課の担当者には大変感謝しています。後日談ですが、その担当者からこんな言葉をいただきました。「今回の設置への取り組みは、本当に大変でした。でもそれ以上に、学生たちの提案が素晴らしかった。そんな学生たちの想いに何とか応えたいと思い、私達も頑張ることができました」と。社会の中で一つの物事を進めるには、こんなに多くのプロセスが必要であり、また大勢の人の協力があって初めて実現できる。ゼミ生たちもこの経験からそんなことを学んでくれたのではないのでしょうか。

——実際にOiTrが設置され、反響はありましたか？

「本当に助かった」「生理用品を忘れたという不安がなくなった」など、まさにこれを待っていた！という声が多く寄せられました。特にコロナ禍で奨学金を受け取りながら通学する学生が増えている中、生理用品の購入にはお金がかかる、で

もお金がないからと言って友人に「ちょうだい」とも言えない。そんな「声なき声」を拾い上げ、安心して勉学に集中できる環境を自分たちで作ることができた。このことは、ゼミ生たちが「生理の貧困」を他人事ではなく「自分事」と捉え、自ら主体的に社会課題と向き合い、解決するための提案を実現することができ、社会人になってもこうした経験を活かしていくことができる「原点」になったと思います。



▲記念セレモニーを開き、短大でのOiTr設置を祝った

■生理のことをオープンに語れる世界へ

——学生たちの更なる挑戦

ゼミ生たちの活動はここで終わりません。青野ゼミでは「ビジョン」を大事にしています。今回の取り組みでゼミ生たちが掲げたビジョンは「男女問わず、生理のことをオープンに語れる世の中にしたい」というものです。トイレトペーパーと同じ感覚で生理用品にアクセスできる、また、男性でも気軽に生理用品を買える。それが当たり前になるような世の中にしたい。OiTrを創価女子短大に設置できたからといって、このビジョンが何ら達成できたわけではありません。

——生理のことをオープンに語れる…壮大で、また難易度の高そうなテーマですね。

ええ。ですが、動かないことには何も変わりません。ゼミ生たちは次の一手を模索していました。そのような中、短大の近くにある東京富士美術館のSDGs委員会と意見交換をする機会をいただきました。私は創価女子短大のSDGs推進担当を務めており、何度か打ち合わせをしていたのですが、その流れでゼミ生と話をしたところ、懇談の場を設けていただけになりました。ゼミ生を交え、「女子大など、女性中心の施設ではなく、様々な人が利用する美術館にOiTrを設置するからこそ意

味がある」「美術館がOiTrを設置することで、より多くの人に生理の貧困について身近に感じてもらえるきっかけとなる。日本の美術館として初の導入事例ともなり、美術館がSDGsを推進する中で、このような身近な課題に取り組むことが大事である」そのような熱意を伝えました。この話に東京富士美術館のSDGs委員会も強く共感してくださって、OiTrの設置が決まったんです。

驚いたことに、東京富士美術館がOiTr設置のプレスリリースをされた際に、「創価女子短期大学の青野ゼミの学生と意見交換を行い、導入へのアドバイスを受け、設置に至った」旨を、わざわざ書いてくださったんです。これまでは学内組織という、いわば身内とのやり取りでしたが、今回は外部の組織と一緒に1つのことを成し遂げることができました。社会人基礎力と言うところの「働きかけ力」や「発信力」の成長に大きく繋がったと思います。

——より外へ外へと発信の場を広げていったんですね。

まさにそうで、その後も八王子市の男女共同参画課の担当者との意見交換や、マスコミに向けた情報発信など、より多くの人へ自分たちの活動を知ってもらおう活動を続けました。そしてYouTubeが主流メディアとなっている今、ゼミ生たちも動画づくりにチャレンジしていきます。

社会人基礎力育成グランプリの東北・関東地区予選大会が2月16日にあり、動画づくりを始めたのは、その予選大会で全国決勝大会への出場切符を掴んでからでした。そして完成したのがなんと、3月10日の決勝大会の前日です。

——そんなにギリギリのタイミングで完成したんですね！

ええ。その間、何度も何度も作り直しながら、どうしたら思いが伝わるのか、どうしたら共感を生むような動画にできるのか、そしてどうしたら「生理のことをオープンに語れる世界」というビジョンに少しでも近づけるのか、試行錯誤が続けられました。

動画についてはちょっとした裏話がありまして、決勝大会で投影するプレゼンデータには「1日で動画の再生回数が1,000回

を突破した」と記載を入れていました。ですが、次は自分たちがプレゼンする番という段階で、再生回数が982回でピタリと動かなくなったんです。原稿を書き直すべきか判断を迫られる中、ゼミ生たちは持てる人脈に連絡し視聴を依頼。発表直前にどうにか1,000回を超え、原稿を直さずに発表に臨むことができました。本当にこのときはヒヤヒヤしましたが、決勝大会本番中にも社会人基礎力を発揮するゼミ生の成長した姿が頼もしく感じました。

インターネット空間は匿名性の高い場ではありますが、その匿名性を排し、自分たちの活動を伝える動画を近い人に紹介するのは勇気がいります。でもそうしたハードルを乗り越え、共感の輪を少しずつでも広げていく。動画作りは学生たちにとってそのような活動になったのではと思います。



▼学生たちが作成した動画はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=8vUKTJS7JRA>



■ゼミ生の思いを受け継ぐ場の創出へ

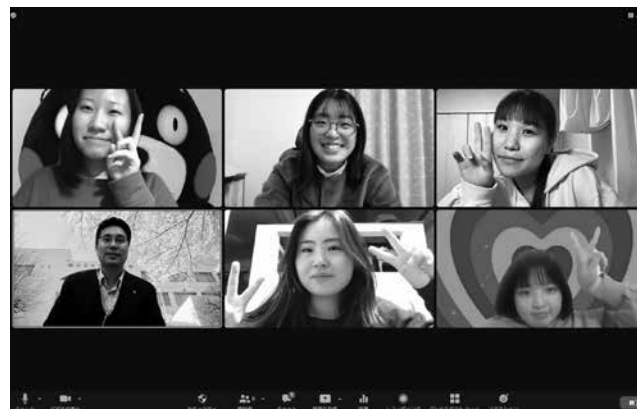
活動に携わったメンバーは3月に卒業しました。では、彼女たちのビジョンが道半ばで途切れたか、ということではありません。例えば、4年制の創価大学に編入し、新天地で生理の貧困の解消に向けた活動に携わる学生もいます。そしてもう1つ。卒業前に、ゼミ生たちにはあることを考えてもらいました。それは、今後入学してくる次の代の学生にも、「生理のことをオープンに語れる世界」を継続的に考えてもらえるような場を作れないか、更には、SDGsに関する様々な社会問題を解決するために学生が主体となって考え、活動するプラットフォームを作ることではないかというものです。そうした場があり続ければ、生理の貧困をはじめSDGsに関する社会課題について幾代にもわたって議論できる、そんなアイデアです。

——確かにそうした場があれば、継続して議論ができますね。でも、簡単に短大に組み込めるものなのでしょうか？

実は短大のSDGs推進担当として、私も悩んでいたんです。1つのゼミの頑張りや、結局そのゼミのメンバーの成長にしか寄与しない。それでいいのか、と。でもこうした場があれば、他の学生にも成長や気づきの機会を与えられます。学生の声を大事にし、短大内でも協議を重ねた結果、『SDGsワークショップ』を立ち上げることとなり、早速今年度からこのワー

クショップをスタートさせられることになりました。

実は私は教員に就任して年数が浅く、今回の活動に臨んだゼミ生は私のゼミの一期生なんです。特に女性特有の問題については分からないことも多く、教員でありながら、私もゼミ生から多くのことを学ばせてもらいました。だからゼミ生がある時、「先生は指導しているというよりも、一緒に頑張るチームの一員だと思っています」と言ってくれたことがあり、とても嬉しかったのを覚えています。そんな学生たちの思いが詰まったこのワークショップを、今後も継続、そして発展させていければと考えています。



▲メンバー間でのオンラインでの打ち合わせは深夜や明け方に及ぶこともあった